

編集後記

ようやく刊行にこぎつけました。早くに原稿を寄せて頂いた方には、本当に申し訳ありませんでした。写真や図版が多く、思いのほか校正に時間がかかったというのもひとつの要因です。おかげさまで、また充実した内容の誌面ができたと自負しています。

巻頭論文は、故谷川健一先生のご子息、谷川章雄先生から玉稿を頂きました。お父様の学問とは別の道を歩まれたとお聞きしましたが、「墓石に刻まれた地名」の発見は、学問の融合だけでなく、章雄先生にとっては父との遭遇でもあったのでしょうか。地名の知られざる一面を提示していただきました。

また私にとって、今号の特集と、五月の飯田大会は、深い因縁を感じさせてくれるものでもあります。「遠山」は、私の恩師、故後藤総一郎先生の生まれ故郷で、私も、柳田研究会の合宿や常民大学などで何度も訪れた土地です。前々回の地名研究者川崎大会での原董さんの発表のなかで、後藤先生の『神の通り路』は天竜川を語るうえでの名著であるとの紹介があり、興奮したものです。また、特集の執筆者の一人、針間道夫さんは、後藤先生が作った最初の常民大学、遠山常民大学のメンバーでもあり、三十五年も前からの同志です。

前号の柴田弘武さんも、もう一人の恩師である庄司和晃先生のもとに集まった研究会、全面教育学研究会がらみで知り合った方で、このことも因縁を感じたことでした。

そんなことを言えば、故谷川健一先生は、私が柳田研究に入ったきっかけとなった「寺小屋外語教室」の柳田国男講座の講師のお一人でした。四十四年も前のことです。この時の講師が、後藤先生、故宮田登先生、伊藤幹治先生でした。この文を書いた次の日の朝刊で、伊藤先生の訃報を知りました。二年前、「宮田さん、後藤さんと亡くなり、次は自分の番だから」と、『柳田国男全集』の完結のために頑張るとと激励を受けたばかりでした。あと三巻というところまでできたのですが、完結をお知らせすることができず残念でなりません。この場を借りて、慎んでお悔やみ申し上げます。

柳田研究を始めた頃の私は、まさかこんな世界にまで引きずり込まれるとは、思ってもいませんでした。なぜこんな因縁話をしたかと言うと、私をここに連れて来てくれた谷川彰英先生が所長を辞めるにもかかわらず、もうしばらくはこの場にいてみようと考えた私自身の自己納得の為です。ということで、今後ともよろしくお付き合いください。

そこで、本号を編集していて嬉しかったことの一つを特記します。それは、八号、九号の反響が出てきたことです。前号の長沢利明論文から、「赤米」地名を古文書に見出した関惠子さんの報告がいい例です。こうした「地名の連鎖」（前号、馬場あき子論文）の相乗効果が大きくなうねりとならんことを願っています。

(O)